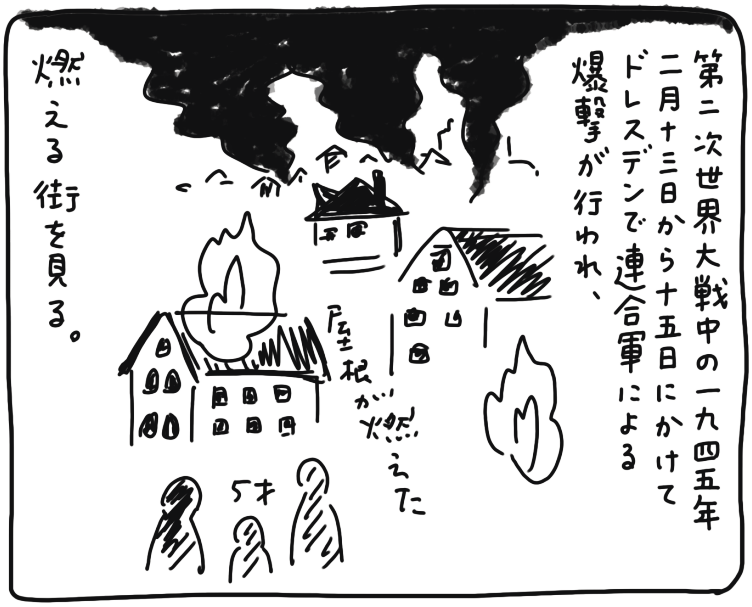
ペンク
A.R. PENCK

満腹家もぐもぐ

一九三九年十月五日、ラルフ・ヴィンクラー（A.R.ペンク）は、ドイツ東部のドレスデンに生まれた。

母と祖父は教師。家にはピアノやギターはあったが、美術に親しむ機会はなかった。

若い頃から、ヘーゲル、カント、レーニン、スターリンを読み、自然科学や万物の起源の探究に興味を持つようになる。

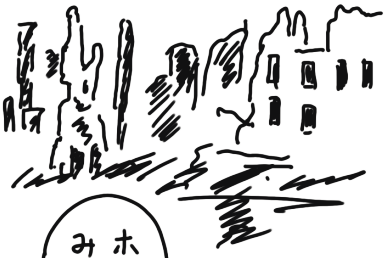


第二次世界大戦中の一九四五年二月十三日から十五日にかけてドレスデンで連合軍による爆撃が行われ、燃える街を見る。

七才の時に、母と訪れたピルニッツ宮殿で、アルノルト・ベックリンの《戦争》（一八九六年）に感銘を受ける。

アルブレヒト・デューラーの《騎士と死と悪魔》（1513-14）にも

街の大部分は破壊され、大きな空地が生まれ、その中で遊ぶ。



一九四五年五月、ドイツは無条件降伏し、ドレスデンはソ連占領地域となり、一九四九年に建国された社会主義国、ドイツ民主共和国（東ドイツ）の一都市となった。

十才で最初の油絵を描く。

風景画

祖父の肖像画

ちなみに当時、東ドイツでは、労働などのテーマを写実的に描く社会主義リアリズムが推奨されていた。

一九五三年、市民学校のユルゲン・ベトヒャーのクラスで美術史や絵画の基礎を学ぶ。

〈〈静物画〉から〉〉
〈〈ピカソまで〉〉

夜はベトヒャーの家でジャズを聴き、互いの作品を持ち寄り、密輸した美術書をめくり、友情を育む。

※ 後にベトヒャーは映画監督となる。教え子を題材に「多数の中の3人(Drei von Vielen)」(1961年)撮影。上映禁止になる。

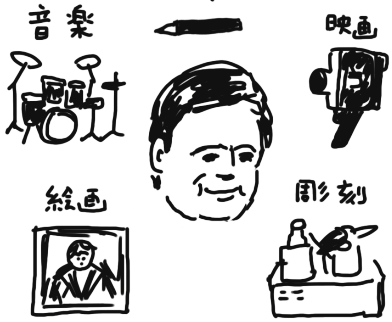
一九五四年、初めての木版画を制作、肖像画を描き販売し始める。

一九五五年、VEB DEWAG(人民公社ドイツ広告代理店)で製図工の見習いとして職業訓練を受ける。

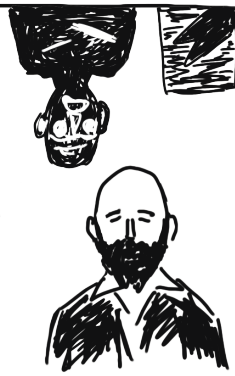
初めて出品した展覧会は、一九五六年にドレスデンで開催された初心者と職業訓練校の学生を対象としたコンクール。家族と街を描いた木版画で入賞。展覧会は、東ベルリンへ巡回したが、ヴィンクラーの作品は、ブルジョワ的退廃であると展示を拒まれる。

政治的な意図や操作に気付き、国家に敵対心を抱くようになる。

見習いを辞め、ドレスデンや東ベルリンの美術学校に何度か入学を申し込むが、受け入れられず、独学することに。



一九五六年、ゲオルク・ケルン(バゼリッツ)と知り会う。翌年、ケルンは西ドイツへ移住。

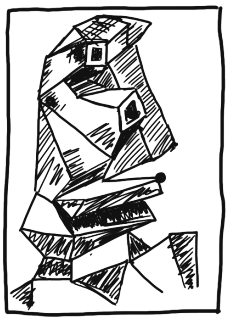


文通により、ジャクソン・ポロック、アントナン・アルトーヴォルスなど西側の文化を知る。

一九五〇年代後半、ピカソ、レンブラントの作品を参照した作品を集中的に制作。東ドイツでは、ピカソはいかがわしい画家とみなされていた。

〈〈なんとも言えない表情〉〉

《帽子をかぶった自画像》1958



《キュビズム的素描》1960

孤独や暴力を描く具象的な絵画も。

〈〈裁判所? 拷問?〉〉

《裁判所》1955

ゴッホの《ジャガイモを食べる人々》からの影響

《食卓の男と女》1959頃

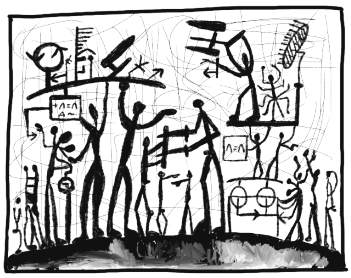
〈〈光と影の対比〉〉

《暗い窓のそばの婦人》1957

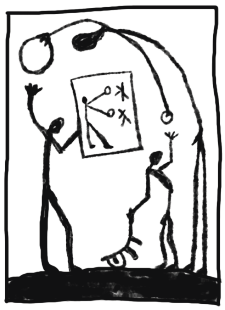
抽象化

一九六〇年に入り、細長い棒状の線で表現された人物が登場。人間の行動の背景にある動機を検証する。

〃東西ドイツの分断？〃
冷戦？



《世界絵画》1961



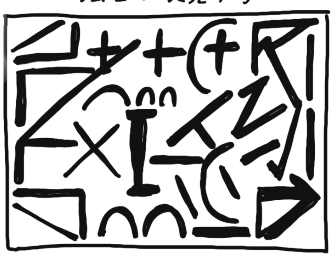
プラカードに注目

《システム絵画》1961

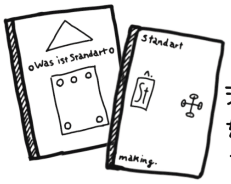
一九六一年八月十三日、ベルリンの壁の建設が始まる。西ベルリンにバゼリッツを訪ねた翌日だった。以後、反体制的な文化活動への取り締まりが厳しくなる。

ヴィンクラーは、サイバネティクスや原始美術の影響の下、棒人間、幾何学的記号やシンボルの体系化を進め、一九六〇年代半ばには社会主義への建設的な貢献を目的とした独自の概念「シュタンダルト」を生み出し、絵画のみならず幅広く展開した。しかし、作品自体は西側の抽象絵画からの影響を疑われ、反体制的とみなされた。

〃独自の表意文字〃



《シュタンダルト》1968



シュタンダルトを説明する本

日用品を用いた彫刻

《シュタンダルト-モデル》1973

「Standart（シュタンダルト）」は、ドイツ語で「標準、基準」を意味する「Standard（スタンダード）」と「軍旗」を意味する「Standarte（シュタンダルテ）」の造語。

詩と音楽で官僚主義的な体制を批判するヴォルフ・ビーアマンと出会い魅了される。

社会主義リアリズムの「リアリズム」を真剣に考えた詩人。

一九六五年、ドレスデンのプーシキンハウスでの展覧会に参加。抽象的な世界絵画やシステム絵画ではなく、肖像画などを出品し、翌年VBK（東ドイツ芸術家団体）の会員候補に選ばれる。

《反-冷たい絵画》1961

東ドイツでアーティストとして仕事をするためにはVBKの会員になる必要があった。ヴィンクラーは一九六九年に入会を拒否され、非公式の芸術活動を続けることになる。

バゼリッツを介して知り合った画商のミヒャエル・ヴェルナーは、一九六八年のケルンのハーケ画廊での個展を皮切りに、ヴィンクラーの作品を西側で積極的に紹介し始める。

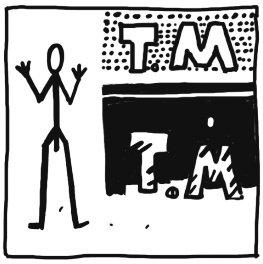
西側へ作品を運ぶ準備

ヴィンクラーは、氷河期研究で知られる地質学者アルブレヒト・ペンクにちなみA.R.ペンクと名乗ることに。ペンクは西側で展示された自分の作品を見ることはなかった。

アルブレヒト・ペンク（1958-1945）

抽象と具象、さらに両者を組み合わせて構成される画面も。

《シュタンダルト 1897》1973



《TM.》1974

一九七一年、ドレスデンで芸術家集団「リュッケ」を結成し、絵画、映画、音楽を共同制作し、芸術の社会主義的可能性を見い出そうとした。

〃みんなで順番に描く〃

《リュッケ》1971

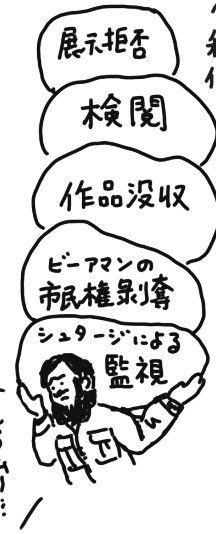
「Lücke（リュッケ）」は、ドイツ語で「透き間、空白」を意味し、一九〇五年にドレスデンで結成されたグループ「ブリュッケ」にちなみ名付けられた。

一九七七年、病になり、友人から渡された木片を削り始め、理論的なものから解放される。

一九七九年、最初のレコードを発売。フリージャズのレコーディングに参加するなど、音楽活動も精力的に行う。

ヨルク・インメンドルフと出会い、一九七八年ケルンで二人展を開催。その後もたびたび共同制作を行う。

一九八〇年、東ドイツでの周辺環境が悪化し、ケルンへ移住。



マルクス・リュペルツ、ペール・キルケビーと友達になり、ヨーゼフ・ボイスの元を訪ねる。

マルクス・リュペルツ

ペール・キルケビー

ブロンズや大理石を用いた彫刻や版画など様々な素材や媒体で制作。

彫刻

《記念碑、分断されたドイツ》1986

版画

《夜の光景》1982

雑誌

「噴火口と雲」1982-90

先史時代のモニュメントへの関心

ニューグレンジ

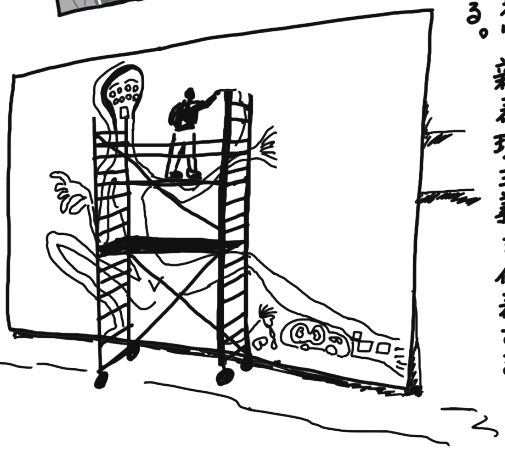
ストーンヘンジ

リラックスした生活を求め、イギリスとアイルランドに拠点を移す。

新たな絵画の動向を取り上げ、世界的に注目を集めた「ア・ニュースピリット・イン・ペインティング」展（ロンドン王立美術協会、一九八一年）、「ツァイトガイスト」展（ベルリンマルティン・グロピウス・バウ、一九八二年）への参加により、バゼリッツ、インメンドルフ、アンゼルム・キーファー、リュペルツらと共に、新表現主義を代表する西ドイツの画家として紹介されるようになる。

一九八九年よりデュッセルドルフ芸術アカデミーの教授となる。（二〇〇五年まで）数え子は130人にのぼり、その中には、奈良美智も。

二〇一七年五月二日、スイスのチューリッヒで七十七才で亡くなる。

近年、A.R.ペンクは、その活動を振り返る研究や展覧会を通して再評価されつつある。

一九九七年、日本で「ペンク展」開催。